



特集

こだわりの産品を紹介
あいなん逸品図鑑

令和2年度分はこちら↓



愛南町
ホームページ

令和元年度分はこちら↓



愛南町
ホームページ

動画はYouTubeの愛媛CATVアカウントでも視聴できますので、左記のQRコードを読み取ってご覧ください。

なお、このコーナーは愛媛CATV愛南局と連動しており、同局が撮影した映像はケーブルテレビ(びやびや愛南タイム)で放送されています。

広報あいなんでは、町内の職人のこだわりの産品(農水産物や加工品、ときには工芸品など)を紹介する「あいなん逸品図鑑」というコーナーを設けています。今回は特集として、3人の方に話を伺いました。

「あいなん逸品図鑑」特集 こだわりの産品を紹介

あいなん逸品図鑑 その⑳



「組子細工」



愛媛CATV
動画

日新建具 清家^{よしとか}義隆さん(御荘平城)

木材の組み方や加工の仕方を変えることで、さまざまな模様が入った組子細工を制作する清家^{よしとか}義隆さん。

父親の跡を継いで出入り口の間仕切りなどに取り付ける戸や障子などを作る建具職人になり、その技術を使って20代前半に組子細工を作り始めました。「最初は失敗ばかりで、納得ができるものが作れるようになるのに10年くらいはかかった」と制作の難しさを話します。

組子細工作りは、「一つ一つの模様がきれい見えるように、緻密な作業だ」と話すように、模様は違和感が出ないように目の大きさが同じになるように整えています。また、自身の作品について、「古き伝統を守りつつ、新しい技術を取り入れてオリジナルのものを作っている」と自信を見せます。

清家さんの制作する作品には、コースターのような小さいものから間仕切りに使う立て戸のような大きなものがあります。ゆらり内海やフレッシュ本松などで売られているコースターは、2日ほどあればまとめて20から30個くらい制作でき、立て戸くらいの大きさのものなら2週間くらいで作れるそうです。

町内で組子細工を作っている事業者は数業者ありますが、その中でも、法律に基づいた技能試験に合格した技能士で全技連マイスターの資格を持っているのは清家さんだけで、「マイスターとして、小中学校の課外学習やイベントなどに参加し、ものづくりについて教えている」と技術が残っていくように後進の育成にも力を入れます。

今後の展望については、「若い人たちに自分の作品を見ていただいて、やりたい人や興味のある人に技術や伝統を伝えていきたい」と意欲を見せました。



▲模様の細部までこだわった自慢の組子細工の作品を手にする清家義隆さん。



▲作品に使われている木材部品は一つ一つ丁寧に手作ります。



▲作品は組子細工で作られたあんどんや壁に飾るインテリアもあります。



わかき真珠のアクセサリー作り体験について

- ▶体験場所 わかき真珠作業場(愛南町赤水23-3)
- ▶制作物 ペンダント、ブローチ、ピアスなど
- ▶営業時間 9:00~17:00(年末年始は休み)
- ▶所要時間 1時間~2時間
- ▶対応人数 2~20人
- ▶体験料金 体験料の他に材料費が必要
- ▶予約方法 希望日の前々日までに電話(090-1176-9657)でお申し込みください。



わかき真珠
ホーム
ページ

組子細工について

組子細工とは、釘を使わずに数ミリメートル程度の細かな木片を組み付けてさまざまな模様を作る日本建築の建具の装飾技法です。

主に和室の障子や欄間などに用いられ、鎌倉時代から現代まで長い年月をかけて磨きぬかれた歴史があります。

組子は木材(主にヒノキやスギ)を使用するため、木それぞれの特性を熟知し、わずかな誤差も許されない精巧な技術を身につけた職人技が必要となる伝統工芸です。

あいなん逸品図鑑 その⑩



「真珠のアクセサリー」

わかき真珠

若木 ^{みず}瑞さん(赤水)



愛媛CATV
動画



▲自身が育てた真珠で制作したアクセサリーを手に笑顔を見せる若木瑞さん。

自身が御荘湾で大切に育てた真珠を用いて、赤水で真珠のアクセサリー作りを行っている若木瑞さん。本業の真珠養殖の傍ら、作業が落ち着いた時期や商品の注文が入ったときなどに制作活動に取り組んでいます。

一見同じように見える真珠も一つ一つ形や色、大きさなどが異なり、「その一粒が世界に一つしかない」ことが真珠の最大の魅力であると力を込める若木さん。アクセサリー作りを行う上で特に意識していることは、それぞれの真珠の個性を見極め、最も美しく輝くようにその特徴を生かすことです。



▲真珠の個性を見極め、輝いてほしいという思いを込めて制作したネックレス。

現在はペンダントやブローチ、ピアス、タイタックなどを制作しており、愛南町ご当地キャラクターのなーしくんのタイタック制作においては、専門の職人と話し合っって枠を作り上げ、最後に自らが真珠を取り付けることで一つの製品として完成させました。

できあがったアクセサリーは道の駅みしょうMIC、ゆらり内海、ホテルサンパールの町内3カ所で販売するほか、個人からの注文に対しては個別の要望に応じたオーダーメイドでの対応も行っています。



▲作品作りを行う若木さん。枠に真珠を取り付けて一つの製品として完成させます。

真珠を身近に感じることで普及につなげていきたいとの思いでアクセサリー作りの体験受け入れも行っており、「フォーマルのイメージが強い真珠をカジュアルに、ジーンズにTシャツでも身に付けられるということを知ってもらいたい」と開催の意図を説明します。

ものづくりへの意欲は高く、「お客さんの声をなるべく拾い上げて作品に取り入れていきたい」と話す若木さんは今後の展望について、「より良い製品作りを行うとともに、真珠が好きな人を増やしていきたい」と真珠の需要拡大を見据えていました。



取材をさせていただける方を募集しています！

「あいなん逸品図鑑」コーナーでは、取材をさせていただける方を募集しています。農水産物や加工品、工芸品など、こだわりの産品を作られている方からの連絡をお待ちしています。

取材した内容は、以下の媒体で発信します。

- ・本紙(広報あいなん)と、町公式Facebook「ぎゅぎゅっと!愛南」に記事を掲載
- ・愛媛CATVの「びやびや愛南タイム」で放送
- ・愛媛CATVのYouTubeアカウントに動画公開

問：総務課 電話：72-1211

町内のキハダマグロ漁について

愛南漁協深浦本所には一本釣りや引き網漁で漁獲されたキハダマグロが水揚げされ、朝市や午後市で競りにかけられています。地元では10キログラム以上の重さのものをシビ、それに満たないものはビンタと呼ばれています。漁業者によるとよく釣れる時期は4月から11月ごろで、特に5月が盛漁期だそうです。

キハダマグロの一本釣り漁はメジカを生き餌にして行うので、漁師は出漁前に自身でメジカを釣って確保し、漁船に保管しています。

あいなん逸品図鑑 その③



「キハダマグロ」

一本釣り漁師

吉田 しんいち 真一さん(船越)



愛媛CATV
動画



▲一本釣り漁を終えて帰港し、キハダマグロの水揚げ作業を行う吉田真一さん。



▲吉田さんが釣り上げたキハダマグロ。愛南漁協深浦本所に水揚げされています。



▲自身が釣り上げた40kgに迫るキハダマグロを持ち上げる吉田さん。

今や町内でも少なくなったキハダマグロ一本釣り漁師の吉田真一さん。もともとイサキの一本釣り漁や遊漁船業を主業にしていたが、武者泊出身でキハダマグロ漁師の姿を身近に見て育ったことから、「自分もキハダマグロ漁がしたい」という思いに駆られ、10年ほど前に漁を開始しました。

キハダマグロやカツオなどの回遊魚は漂流物に集まる習性があり、一本釣り漁はその習性を利用して行うため、漁場にはブイと呼ばれる人工的な浮き漁礁が設置されています。通年で漁をしている吉田さんは、「特に時期が決まっているわけではないが、春先と秋ごろがよく釣れる」と話します。

取材した今回の漁では、水揚げ前々日の午後11時に船越を出港し、50マイルほど南に向かって漁を行い、20~40キログラムほどのキハダマグロを14本釣り上げて水揚げ前日の午後7時に帰港しました。水揚げ日には夜明け前から船の清掃作業を行うなど、次の漁に向けての準備も入念に行います。

自身もキハダマグロが好きだと言う吉田さんは、「刺し身や焼き切れ、頭やアラは煮付けにするとおいしい」と薦めます。

やりたくて始めたキハダマグロ漁にはやりがいを感じており、「値段に関係なく釣るのが楽しい」と話しますが、漁に用いる生き餌のメジカを確保することが大変であるとも言い、漁の苦労をのぞかせます。

「ブイに魚が付いている時期にしか漁ができないので、できる限りたくさん漁に出てたくさん釣りたい」と意気込む吉田さんは、早速次の漁に向けてメジカの確保に向かいました。